



カリタスを生きる“社会福祉にキリストの心を”

日本カトリック司教協議会カリタスジャパン
社会福祉活動推進部会

「互いに愛し合いなさい」(ヨハネ 13:34) とのキリストからの“ご命令”は、地域社会で、教会で、施設で、各々、さまざまな分野で愛の奉仕に励んでいる人たちに、キリストの心に根ざした支え合いの精神を思い起こさせてくれます。

この支え合いの精神のなかで培われた愛の実践の成果として、カトリック社会福祉事業は組織的にかつ体系的に推進されています。そして、活動の分野も福祉全般にわたっております。また、社会情勢の目まぐるしい変化の中で、国の福祉の理念や行政指導のはざまにあつて、「カトリック福祉の限界」という課題も浮上しています。

カリタスジャパンには、ここ数年、社会福祉に関わっている人たちから、活動の分野や職種の違いを超えて、福祉の根底に流れている共通の理念や活動を続ける心の支え、拠り所となるものが欲しいとの声が寄せられていました。私たちはこの声を謙虚に受け止め、検討してまいりました。そして、今、私たちは、その声にこたえ、カリタスジャパン社会福祉活動推進部会のメッセージとして「カリタスを生きる、社会福祉にキリストの心を」をお届けさせていただきます。

福祉に関わるということは、具体的には経済所得保障、保険、医療、衛生などの制度や政策の枠の中で福祉の事業や活動を追求することではありますが、

カトリック福祉ということは、一人ひとりが大切にされるという「人間の尊厳」の追求にあります。

一人ひとりが支え合うことで結ばれた愛の実践によって、福祉の現場で「人間らしく生きられる社会」を実現していくことが福祉の目的となります。

現代日本の社会では経済至上主義が優先課題とされ、多くの人の関心は権力と物質的な豊かさに向けられ、あらゆる面で競争が強いられています。その結果、隣人と共にいる私たちのなかに差別、偏見、無関心が生まれ、ついには、お互いの人権を無視し、いのちは粗末にされ、人と人との絆は断たれ、多くの人たちが本来の人生の意義と目的を見失っているのが現実となってきています。

今、福祉を問うまえに、人間をどのようにとらえているかという人間観をここで確認したいと思います。カトリック教会では、全ての人間が神の似姿として、神によって創造され、ご自分の独り子さえ惜しまないほどかけがえのない者として愛されている存在であり、そこに人間の尊厳があり、その尊厳はいかなる権力によっても侵害されるものではない、との立場に立って人間を捉えています。つまり、この人間観は神とのかかわりの中での人間の捉え方であり、その具体的な姿は聖書のなかでキリストの言葉や行いによって示されています。

イエス・キリストは、神とかかわる人間の姿を示される時、特に病人、社会からきりすてられた人、苦しむ人とかかわりの中で、人間の本来の姿を示そうとしています。

『主よ、いつわたしたちは、餓えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』

そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さな者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである』(マタイ 25: 37-40)

小さく弱い人とご自分とを同一視なさるイエスの姿勢と視線によって、私たちは人間存在の本質を理解することができます。人々の上に限りなく注がれるイエスの姿勢と視線は御父の愛を伝えることです。

この人間に対する神からの熱い思いや情熱が私たちを隣人愛や愛の奉仕にかりたててくれるのです。

隣人愛を生きる姿を、強盗に襲われて瀕死の状態にあった人を見捨てて通り過ぎることができずに近付き、できる限り力を尽くして助けようとした「善いサマリア人」(ルカ 10:30-35) に見ることができます。

「善いサマリア人」の隣人愛の行為は、ひとつの場所を共にした人間同士の出会いから生まれる行為です。隣人愛の実践は、創造されたいのちをお互いに育てていくこと、そして、人それぞれが愛されている存在であり、いのちの尊さに輝きと人権をゆるぎないものにする行為です。

日本の教会は、聖フランシスコ・ザビエル以来、宣教師・修道女及びその協力者たちが先頭に立ち、社会の必要に応じて、窮乏に喘ぎ、助けを必要とする人たちに愛の奉仕を開始し、その活動は日本における慈善救済事業の先駆けとなりました。そして、その精神と活動は、現在の社会福祉事業の理念や発展に多大な影響をあたえてきております。そして、今、なお、伝統あるカトリック社会福祉施設の活動は高く評価されております。

しかし、現在、このカトリック社会福祉事業にも深刻な問題が起きています。それは事業を支えてきた修道会会員の高齢化や召命減少のために事業の存続が危ぶまれているのです。福祉事業のあり方、体質、活動についての見直しが求められているのですが、これは当事者だけの問題ではなく、カトリック教会全体で考え、取り組んでいくべき問題であると考えられます。教会共同体内の社会福祉への関心の薄さと支援の欠如が指摘されるどころです。

教会共同体は、教会の枠を超えて、社会に開かれ始めており、かなり改善されてきたと言えますが、「互いに愛し合いなさい」という精神が、教会の枠を超えた社会福祉事業の分野でまだ十分に生かしきれていないという危惧があるのも事実です。

カトリックの社会福祉活動の取り組みは、教会の内と外をつなげる基本的な宣教の場といえるのではないのでしょうか。この分野の取り組みを疎かにして、放置することは、教会としての社会的責任を問われることでもあります。つまり、カトリック社会福祉の体質の改善は、教会共同体の全体の問題であり、体質改善の期待をうけて、共同体全体で社会的責任を担っていくことにより実現

されていくといえます。

そして、その延長線上にカトリック社会福祉の固有の意義と役割が新しい方向性として示されるでしょう。

私たちは、神からご自分の独り子さえ惜しまないほど大きな愛をいただいていること、また、その愛によって導かれてきたことを知っています。更に、自分の生き方を通してこの神の愛を人々に伝えていく使命を意識しています。福祉の現場にいる私たち、また福祉にかかわろうとする私たちは、神の愛を伝えるために最適な場を与えられたと言えますし、また、自分の生き方そのものがここにあるといえましょう。

聖母マリアは、神の子を宿すという天使からの告げを受けた時、その祝福と喜びを決して独り占めにしませんでした。直ぐに、エリザベトを訪問し、神から頂いた破格の恵みを、年老いて身ごもったエリザベトにもその胎内の子どもにも伝えながら、その家で愛の奉仕に励んでいます。(ルカ 1 : 26-55)

恵みは外向きであり、喜びも外向きです。ここに福祉の原点があるような気がしてなりません。

このメッセージは、1996 年から取組んだ「カトリック社会福祉の共通理解」の文書を作成するかどうかの話し合いのなかで学んだことをまとめたものです。福祉の考えかたについては、もし 10 人いるなら、10 通りの福祉の考え方があるということです。従って、社会福祉の理解を、ある限定された枠の中で、一つの文章としてまとめるのではなく、お互いが共通の理解を迫及する姿勢こそが大切であり、その姿勢を常に共有するということで、このようなメッセージの形をとりました。

今まで多くの方々のご意見をいただきました。この場を借りて心からお礼と感謝を申し上げます。